

歓迎レセプションにおいても、日本の当事者委員が司会を行った。司会を担当した2人は、当事者活動経験の少ないメンバーであったが、この日のために、司会の手順や話す内容を、支援者と相談し、メモを作成するなど、自発的に準備を進めた。また、日本のことを紹介するために、イギリスの当事者への土産として日本の駄菓子を用意したり、通訳者なしで話をしたりなど、積極的な交流が見られた。

招聘委員会(2003年7月20日)

交流セミナーから5カ月後になるが、報告書の完成の報告と、当事者向けの報告書の作成、交流セミナー後の参加者の近況報告を兼ねて、最後の招聘委員会を開催した。

招聘委員会では、各セミナー(知的障害者を中心としたセルフアドボカシー活動モデル事業[英国:スウィンドン・ピープルファースト及びブリストル大学ノーラフライ研究所]、精神障害者の就労支援プログラムのモデル事業[米国ミシガン大学ソーシャルワーク部])の報告が行われた。

委員会では、「いろんな障害のある人やグループのことを知ることができた」「セミナーで話をするのは難しかったが、やったことでみんなが褒めてくれた」「話をしたり、発表したりすることは、緊張したけれども、うまくできてよかった」「いろんな人たちの話をきいて、自分がかわった」「イギリスの人たちにもっと質問すれば良かった」など、多くの発言があった。また、これからのことについて、知的障害のある人たちは、自分たちのためのサービスについて調べて、意見をいっていくこと、情報が簡単にわかる新聞づくりをしていくこと、精神障害のある人たちは、交流セミナーで学んだクラブハウス活動を、日本の中でどう展開できるか考えていくこと、を確認した。

情報誌(「国際エンパワメントセミナー新聞」)作成

最後の招聘委員会を受けて、交流セミナーの様子を報告する情報誌の作成を行った。これは、昨年度の報告書は、当事者向けの報告を出していなかったということと、交流セミナーにおいて、イギリスでの当事者向けの情報提供の取り組みが紹介²され、その必要性が本研究において認識されていたこととも関係している。情報提供の必要性については、すでに昨年度の報告書においても指摘されており³、またエンパワメントの視点からもその必要性がいわれている(詳細は次項参照)。

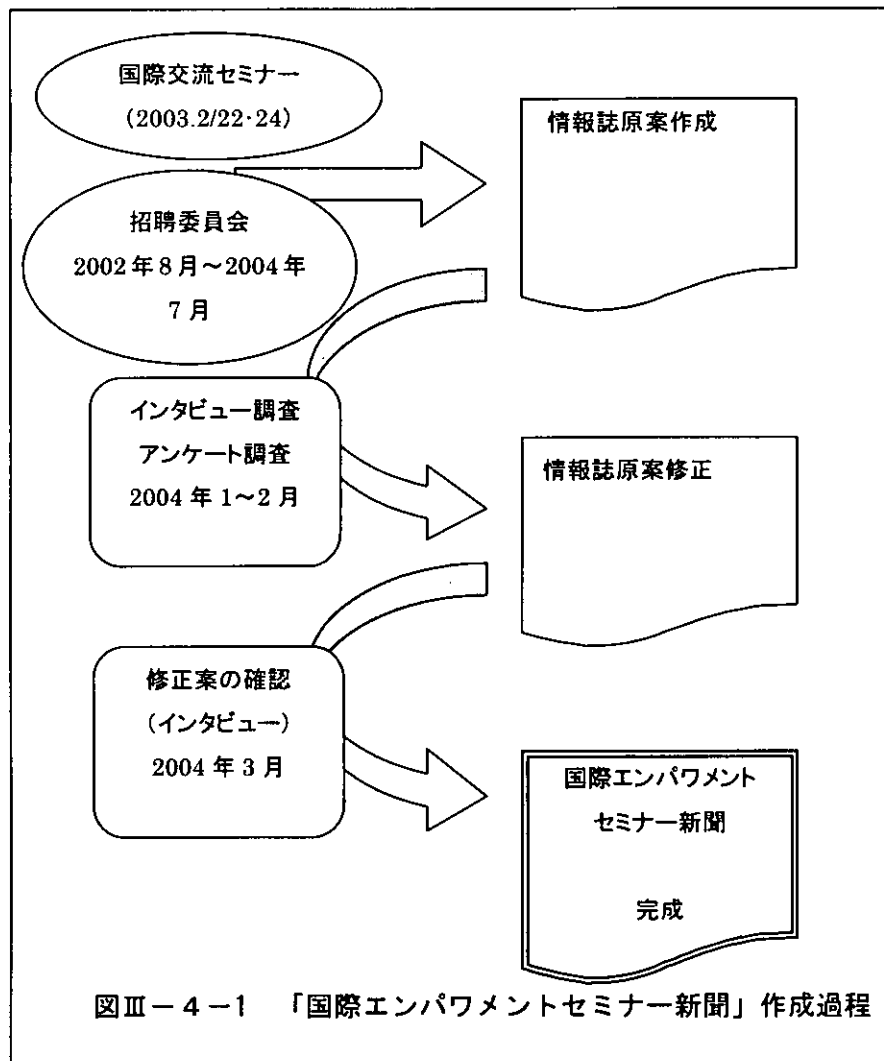
本研究は、当事者参加型活動のプログラム開発を最終目的としているため、本来なら、当事者中心の情報誌作成が計画されるべきであるが、今回は、①参加者が地域的に離れていて、集まりにくい点、②各地域で当事者活動を積極的に展開しているメンバーが多く、日程調整が難しい点、などを考慮し、支援者中心で紙面を作成することにした。しかし、できる限り当事者の意見を紙面に盛り込んでいくために、インタビューやアンケートなどの手法を用いて、当事者の意見を収集し、紙面に反映させていった。その過程は、図III-4-1に示した。

作成過程においては、情報誌の原案をもとに、7名(招聘委員3名、セミナー参加者4名)に協力を依頼し、インタビュー調査(うち1名はアンケート調査)を実施した。

招聘委員からは、情報誌原案が、交流セミナーを振り返ることにつながり、「セミナーに参加したことで、いろんなことを話せるようになった」「招聘委員会に参加した他の人たちのことをもっと知りたい」といった意見や、インタビューを受けることに対して、積極的な準備をしたり(職場の往復時にいつも情報誌原案を携帯し目を通す)、インタビューを受

けたことを職場の仲間に話したりといった、インタビューを依頼されること自体への本人への積極的な影響をみることができました。

また、インタビュアー側は、当事者の話やその反応を直接体験することによって、改めて、情報誌原案の難しい部分や、伝わらない部分を確認することができた。その当事者－支援者間の相互作用の体験を新聞の修正に反映させた。



(3) 成果と課題

今年度の研究において、当事者参加型活動における必要な要素として、以下の点を確認することができた（表Ⅲ-4-1 参照）。

まず、新たに2つの要素を確認した。

- ・ 話の内容やテーマへの関心を引いたり、具体化するためのツールの使用【d】

例) 地球儀のビーチボールを使ったテーマの設定…話のきっかけ作り、関心作り
写真の使用…視覚的な提示による具体化

- ・ 他者からの積極的な評価【e】

例) 支援者からの評価や、自分の発表に対する達成感・満足感

また、昨年度の研究結果の要素について、さらに具体化することができた。

- ・ メンバー間の交流を深めることを意図的に行っていく重要性【b1】

→自分の暮らしとの類似性（共通の話題）【b2】

例) 同じ車イスの当事者同士という共通点を通しての会話の促進

- ・ 経験を積む機会提供【c1】

→役割の設定【c2】

表Ⅲ-4-1 当事者参加型活動における必要な要素

	確認された構成要素	具体例
a	複数の仲間がいることの安心感	
b1	メンバー間の交流を深めることを意図的に行っていく重要性	
b2	自分の暮らしとの類似性(共通の話題)	車イスの当事者同士
c1	経験を積む機会提供	
c2	役割の設定	司会の担当 インタビューの依頼
d	話の内容やテーマへの関心を引いたり、具体的に するためのツールの使用	世界地図のビーチボールの使用 写真による説明
e	他者からの積極的な評価や成功体験	セミナーでの発表に対する周囲の評価 活動への満足感や達成感

例) 交流セミナーにおける司会や、インタビューとしての役割設定により、活動への積極的参加

評価活動の意義

当事者へのインタビューは、2回実施している(2回目のインタビューは、招聘委員2名、セミナー参加者2名に実施。図Ⅲ-4-1参照)。1回目のインタビューでは、情報誌に関して、一通りの評価は得たものの、インタビューの手応えが十分であったとはいえなかった(「わかる」という回答であっても、さらに具体的な質問をすると答えがかえってこない、「どこがわからないかもわからない」などの発言)。しかし、2回目のインタビューにおいては、調査者と顔見知りになっていたこともあり、よりスムーズに会話を進めることができた。特に、インタビューのうち招聘委員とは、交流セミナー準備期間を通しての関わりがあったため、よりリラックスした雰囲気でのインタビューを進めることができた。このインタビューにおいては、情報誌に関する評価以外にも、「他のグループ、他の国の人たちと交流してみたい」「自分たちの活動に、ハンドベルの人たち(歓迎レセプションで演奏した当事者グループ)を呼んで、演奏してもらいたい」など、新しくできた関係の維持や、積極的な交流の意志を示す発言や、「(セミナーを)1回だけでなく、何回かやってほしい」「セミナー1回だけでは自分の中に残らないけど、2回3回とやれば残る」といった、交流セミナー自体に対する評価も聞くことができた。

今回は、情報誌作成の一環としての取り組みであったが、評価活動を進めるためのポイントとして、以下の点を推察することができた。

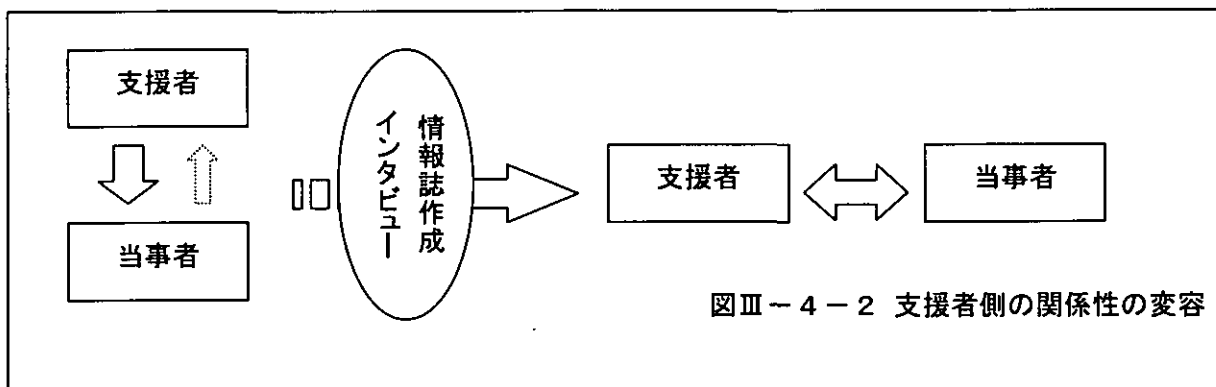
・ 当事者-支援者の時間をかけた関係づくり

研究活動における当事者-研究者としての支援者の関係は、一過性のものである場合が多いが、今回の知的障害の当事者への評価活動においては、時間をかけた関係の形成が、より具体的で、醸成された考えを導き出す手助けになった。また、そ

の形成過程は、支援者側の変容の過程でもあったといえる。情報誌は、支援者（研究者）→当事者という一方通的な提示で進められた。しかし、インタビュー過程を通して、当事者側からの発信（または発信なし）を受け、支援者側は、壁にぶつかり、困惑を経験した。その後、情報誌の改定・インタビューを通して、より当事者の意見を中心に、共同していく関係を構築する立場を意識するようになった（図Ⅲ-4-2）。

・ 評価対象となるイベントの設定

今回の交流セミナーというイベントにおけるテーマ「エンパワメント」は、言葉



そのままでは抽象的であり、「自分の暮らし」に密着した表現（言葉）であったとはいえない。しかし、準備段階から実施、そして評価という一連の活動の後のインタビューからは、新たな交流を希望する声や、セミナー実施の希望などの発言が見られた。これは、交流セミナー企画・実施から情報誌作成の過程において「エンパワメント」という抽象的であったテーマの中身が具体化され、当事者の暮らしにより身近なものとなっていったことが予想される。こうしたことから、従来のイベントと比べ、①テーマのもつ可能性（「自分の暮らし」に引き寄せることが可能な内容の包含）、②準備－実施－評価への関わり（招聘委員会活動を通じた、準備から終結までの段階を追った関わりの設定）、という点において今回のイベントの特徴があり、今後イベントを設定するときのポイントになると考えられる。

・ イベントの終結後のフォローアップ

通常、イベントの終了が、活動の終結となることが多いが、イベント終了後、かなりの時間が経過してしまったあとでも、その参加した活動に対する思いや考えは持続していることが今回確認できた。適切な情報と支援があれば、また新たな活動の機会を生み出すことも可能であろう。フォローアップという点では、招聘委員会活動の取り組みは不十分であったといえる。しかし、評価活動は、当事者参加型活動を次のステップへとすすめる一つの方法となっていくことが予想される。

まとめ

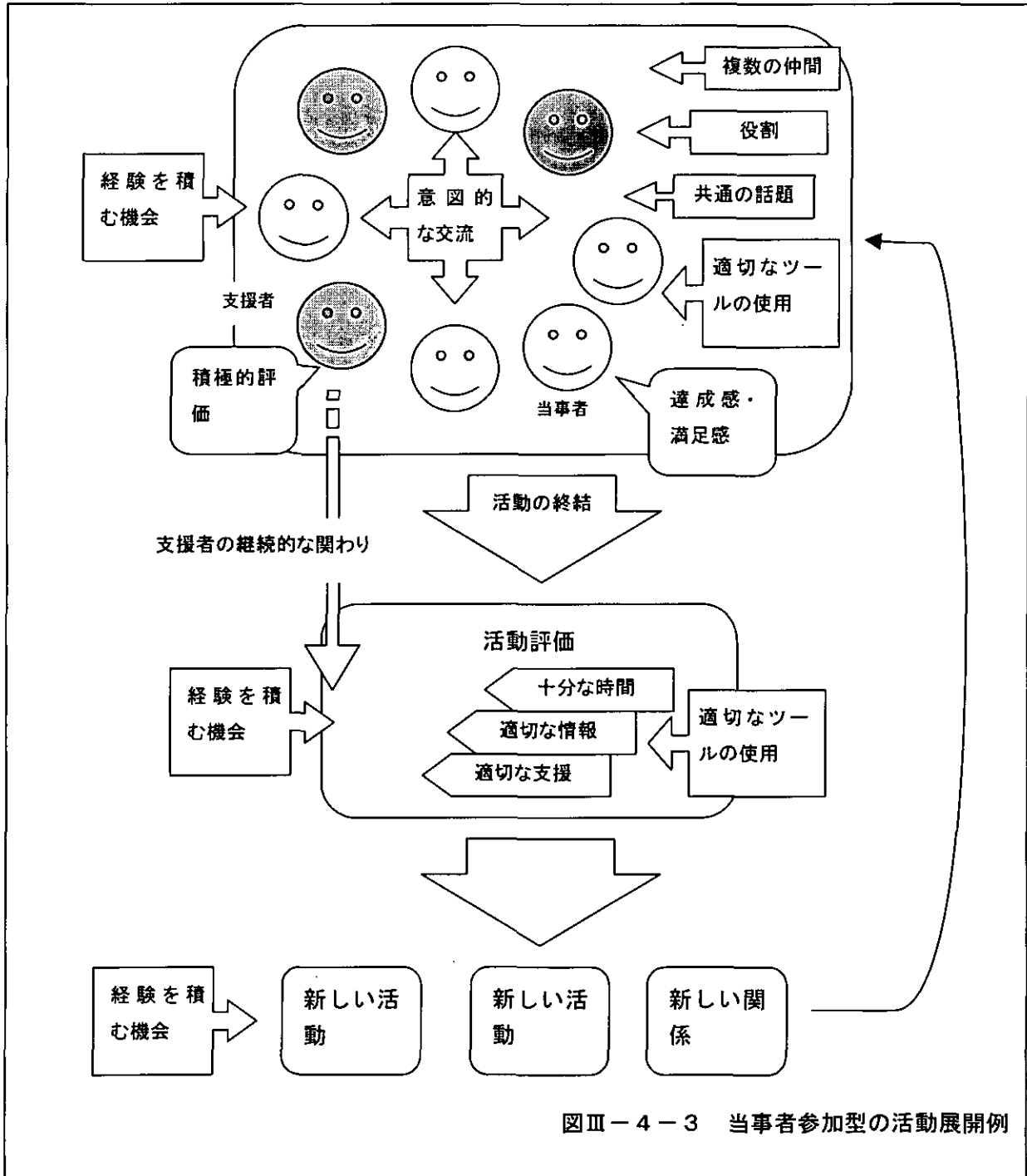
今回の研究を通して、当事者参加型活動を進めるときに必要な視点として見えてきたものをまとめると次のようになる（図Ⅲ-4-3参照）。

a) 段階を追った設定と、そこでの「経験を積む機会」の提供

- ・ 準備－実施－評価への関わり

b) 当事者参加型活動を展開する上での留意点

- ・ 意図的な交流
- ・ 複数の仲間がいる環境の設定
- ・ 参加者それぞれの役割
- ・ 本人の暮らしに密着した共通の話題
- ・ 当事者の理解や表明を助ける支援ツールの使用
- ・ 支援者からの積極的評価



図Ⅲ-4-3 当事者参加型の活動展開例

- ・ 参加者の達成感・満足感
- c) 活動終了後の評価活動の実施および留意点
 - ・ 十分な時間をかけた活動
 - ・ 必要な情報の分かりやすい提供
 - ・ 当事者の望む支援
 - ・ 当事者の理解や表明を助ける支援ツールの使用
- d) 次の活動へのステップ
 - ・ 新しい関係づくりや活動へつなげる支援

福祉施策の様々な場面において、「利用者主体」の重要性がいわれている。また、行政が策定する地域福祉計画作成過程で、市民参加として障害当事者が委員として参加する機会も増えつつある。しかし、実際には、名目だけの参加であったり、障害の状況に応じた支援がなされていない状況もみられる。

今回の研究は、当事者参加型活動のあり方を模索するための一例に過ぎないが、既存のサービス運営の中で陥りがちな、障害ゆえに参加、自己決定、自己選択が困難であるという着地点ではなく、障壁を取り除き、支援環境を変えるための一つの出発地点を示したといえよう。しかし、今回導き出した視点が、どのような活動においても有効であるのか、残されている障壁は何かのか、また、当事者は活動を通してどう変容していくのかといった点について、更なる研究が必要である。

(浦野 耕司)

¹ 茨木尚子「第2章 サービス運営・評価活動における当事者参画の事例検討 1. 参加型運営活動モデルの事例」 23-35 p 厚生労働科学研究費補助金障害者保健福祉総合研究事業 主任研究者 中野敏子『障害当事者参加型の福祉サービス運営・評価のプログラム開発に関する研究（平成14年度総括・分担研究報告書）』

² Plain Facts, Norah Fry Research Centre, <http://www.bris.ac.uk/Depts/NorahFry/PlainFacts/>

³ 「第2章 サービス運営・評価活動における当事者参画の事例検討 4. 海外の当事者参画活動事例」 73p 前掲

2. 当事者参加型活動における情報支援活動に関する考察

—当事者のエンパワメントという視点から—

前節で触れたように、最後の招聘委員会において当事者向けのセミナー報告書を作成することが確認されたことを受けて、研究者チーム 2 名（本章の執筆者）は、イギリスにおける当事者向けの情報提供の取り組みとしてセミナーで紹介された『プレーンファクト』（*Plain Facts*）をはじめとするいくつかの先行研究を参考にしながら、情報誌を作成した。本項では、その作成過程と、そこから見えてきた当事者参加型活動における、当事者のエンパワメントを目的とした情報伝達の支援のあり方について報告をしたい。

（1）先行研究

（a）『プレーンファクト』

『プレーンファクト』は、知的障害のある人たちの生活に関することについて、様々な研究者が調査を行い明らかになったことをわかりやすくその人たちに伝える、という目的で発行されているものである。掲載内容は、便宜的に分類すると、①生活に関すること、②サービスに関すること、③仕事に関すること、④教育に関すること、⑤その他、の5つのカテゴリーに分けられる。『プレーンファクト』は、文字（紙面）と音声（カセットテープ）の2つの媒体にて発行されているが、本項では、紙面版について分析をする。

掲載情報の伝達方法

紙面版はA3サイズの見開きで白黒インクの両面印刷という、4ページ構成が基本となっている。紙面構成は、まず表紙となる1ページ目は導入として、各号の特集内容の概要が項目化され記載されている。見開きの2-3ページ目には、調査結果についてより具体的に書かれている。レイアウトは、概ね半ページにつき1つの項目という割り当てになっている。また、各ページにはそれぞれイラストが導入されている。そして、最終ページには、内容に関する情報（問合せ先）、参照文献、調査者の氏名および連絡先が顔写真とともに掲載されている。これにより、どのような人が調査に携わったかが容易に分かる形になっている。また、全体をつうじて、短く平易な文章が用いられている。

当事者の関わり

『プレーンファクト』の作成には複数のスタッフがチームとして携わっているが、その中に複数の知的障害のある当事者も含まれており、顧問として内容に関する助言を行っている。このように当事者が情報の伝えられ方などについて助言する存在は、『プレーンファクト』が、より多くの当事者に共有されることを担保する上で重要である。

（b）『自立への旅』（*Journey to Independence*）⁴⁴

『自立への旅』は、イギリスのセルフ・アドボカシーグループが自分たちで生活をコントロールするひとつの手段としてのダイレクトペイメント制度に関する調査の報告書である（詳細は前年度報告書に詳しい）。同報告書では、「自分で生活をコントロールすること」を、自分でどんな暮らしをしたいのか考え、実際に組み立てていくことと位置付けており、そのために必要な情報を自分たちにふさわしい形で（“accessible”）得られることを重要な要素の一つとして位置付けている。具体的に、知的障害のある人たちにとって望ましい情報の形態として、以下の点を検討項目に挙げている。

- 1) 絵やシンボルが使われている
- 2) 文字が大きい(18ポイント程度)
- 3) 簡単な語句を用いるなど、文体がシンプルである
- 4) 文章(1つのセンテンス)が短く、パンチが効いている
- 5) 専門用語など、一部の人にしか通じない語句は用いない
- 6) ゆとりのあるレイアウト
- 7) テープ(CD)やビデオなど文字以外の媒体も用いられている
- 8) 実際に制度やサービス(この場合はダイレクトペイメント)を使っている人の写真(や場面)を載せる

また、提供される情報には、知的障害のある人たちにどのような権利があるかという点が含まれている必要があるということも指摘されている。それによってその人たちが自分たちの将来を見通すうえで役立つためだという。

(c)共通の視点

ここで、両文献を分析すると、共通して見られる視点として以下が指摘できる。第一に、両文献とも将来も視野に入れて自分たちの生活をコントロールするということを重視している点である。

第二に、両文献とも知的障害のある当事者が、生活に関する情報がより多くの人に共有されることを一つの目的に、調査チームの一員として携わっている点である。

これらの点からは、適切な支援(この場合は情報)があれば、自分たちの生活に関することにおいても、排除されることなく、自分たちで生活を組み立てることができるという視点が導き出される。また、自分たち(の生活)に関することは自分たちがエキスパートであり、一番良く分かっている、だから自分たちを抜きに語られてはならない、という当事者エンパワメントにおける重要な考え方が具現化されていると言える。

(2)「国際エンパワメントセミナー新聞」の作成

筆者らは、上記で取り上げた先行研究で提示されている情報形態を参考にしながら、情報誌の作成を行った。その後、『プレーンファクツ』に見られた、作成プロセスにおける当事者の助言の存在を参考に、当事者との関係性を持つ手段としてインタビューとアンケートを実施し、掲載されている情報の伝わり易さについて当事者の意見を聞くという手順を取った(図Ⅲ-4-1参照)。

(a) 原案作成

まず、情報誌に載せる内容の決定であるが、セミナー1日目からは障害のある人たちを取り巻く考え方の変遷と、ダイレクトペイメント制度に関することを取りあげた。セミナー2日目からは、イギリスの当事者の紹介と日英両国の障害者の交流の様子、セミナー終了後に開かれたパーティの様子について、写真を中心に掲載することとした。最後に、招聘委員会活動の目的の1つであるエンパワメントについてまとめることとした。

レイアウトは、1ページにつき1つの内容を割り振った。最終的に、紙面構成は、A3サイズの見開き2枚・全8ページ、白黒印刷とした。

また、絵は、ワープロ機能(マイクロソフト・ワード)に搭載されている図形(フェイスマークや吹き出しなど)を組み合わせて作成した。この段階では筆者らは、掲載内容を

できるだけわかりやすく、ポイントを絞り伝えることを狙いとした。

(b) インタビュー・アンケートの実施

次に、作成した原案についてセミナーに参加した当事者に対してインタビューおよびアンケートを実施した。

インタビューは、インタビューガイドを作成し、さらに当事者一人ひとりの状態を考慮し、

(ア) インタビューガイドを用いた個別インタビュー (1名)

(イ) インタビューガイドを一部用いながら、半構造的に行った個別インタビュー(1名)

(ウ) インタビューガイドを一部用いながら、半構造的に行ったグループインタビュー (2名)

(エ) (イ) の手法で、ビデオ撮影を伴ったもの(2名)

の 4 パターンで実施した。原案は事前に郵送し、予め目を通してもらうよう依頼した。インタビューガイドの内容は表Ⅲ-4-2にまとめた。

表Ⅲ-4-2 インタビュー・アンケート質問一覧

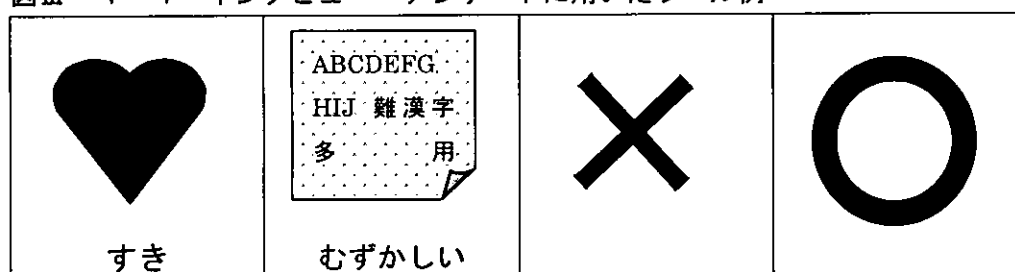
検証点	質問例
印象に残っているページの有無	一番気に入ったところはどこですか？
表現のわかりやすさ・わかりにくさ (絵を含む)	文章を読んで内容はわかりましたか？ 写真があってよかったですか？いりませんか？ 絵があってよかったですか？いりませんか？
レイアウトについて	字の大きさはどうですか？ 大きいですか？小さいですか？ちょうどよいですか？ ふりがながあってよかったですか？いりませんか？ 絵と写真はどうですか？ 多いですか？ちょうどよいですか？少ないですか？
情報量について	字の量はどうですか？ 多いですか？少ないですか？ちょうどよいですか？ 全部読むのは大変でしたか？
情報の質について (有用な情報の有無)	ためになったところはありますか？ 新聞のなかで、もっと勉強してみたいと思ったことはありますか？
新聞の提供方法について	紙に書いてあるものを読むのと、テープや CD に録音したものを聞くのと、ビデオで見るのと、どれが一番いいですか？

インタビューを実施する際の工夫点の 1 点目として、質問に対して選択肢を用意した。例えば、字の大きさを尋ねるのに、「字の大きさはどうでしたか？」とだけ聞くのではなく、「多かったですか？少ないですか？ちょうどいいですか？」と付け加えた。(具体的な選択肢の用意)

2点目に、ツールとして、質問の内容を紙に書いたものを用意した。その際、用紙1枚につき1つの質問のみを、大きな字で印字した。また、選択肢の部分に絵も挿入した。インタビューでは、それを卓上に用意し、指で文字を追いながら口頭で質問していった。(質問内容のビジュアル表示)

3点目に、もう1つのツールとしていくつかの図柄のシールを用意し(図Ⅲ-4-4参照)、新聞のなかでよかったところや分かったところ、難しかったところに直接シールを貼って評価してもらった。(ツールの使用による意思伝達方法)

図Ⅲ-4-4 インタビュー・アンケートに用いたツール例



4点目に、1回目のインタビューの結果を受けて、質問の仕方やインタビューの内容を変えていった。結果的に、上述した4パターンとなった。なお、半構造的インタビューでは、はじめに、原案を1ページずつ見ながら、気に入ったところや難しいところなどがあるかどうか質問をし、それからインタビューガイドから質問を補足するという方式をとった。(インタビュー導入部分の変更)

5点目に、インタビューイの職場や活動場所での支援者も同席をし、必要に応じてインタビューア(筆者ら)の質問で伝わりにくい部分についてフォローを得た。(日頃から関わりのある支援者に補助的役割を依頼)

一方、アンケートを実施するに当たり工夫した点として、各質問の選択肢の横にチェックボックス(空欄のマス)を用意し、そのなかに○をつけてもらうという方法をとった。アンケートは、インタビュー後に実施したことから、インタビューをつうじて筆者らが得た気付きや反省点が反映された形となった。具体的には、アンケートでは、インタビューガイドに比べて質問文をなるべく簡単な言葉づかいで記した。また、他の状況を連想し易い言葉づかいを避けた。例えば、「CDやテープに録音したものを聞く」という質問は、「音で聞く(CDやテープに録音したものなど)」という具合である。これは、インタビューをつうじて、CDという言葉が自分の好きな音楽のCDを連想しやすいという発見に基づくものである。

(c) 修正案作成

インタビューおよびアンケートから明らかになった点を、上記にて示した『自立への旅』の情報形態要素に照らして、以下にまとめた。

絵やシンボルについて(上記①(b)の1)に対応)

絵の量については、ちょうどよいとの意見を得た。一方、絵の内容については、難しいという意見も一部あった。

文字の大きさ・文章の簡潔さ・レイアウトについて(同2)~6)に対応)

文章に関して、文字の大きさやふりがなの有無については、概ね支持的であった。一方、内容については、分かった（理解できた）という意見が多かったが、分からなかった、“多分”“なんとなく”わかったという意見もあった。文章の内容に関する質問では、文字の大きさやふりがなの有無に関する質問のときに比べ、回答に時間がかかったり、明確な答えが出にくい、答えが返ってこない、といった傾向が見られた。

情報提供の媒体について（同 7）に対応）

新聞の提供方法については、新聞（紙に書いてあるものを読む）を支持する意見が多かった。その理由として、新聞は携帯が可能であるため、時間や場所を問わず好きなときに読めるという意見があった。しかし、他の媒体を支持する意見もあり、総体的にはばらつきが見られた。

実生活に則した写真の掲載について（同 8）に対応）

写真は、セミナーやパーティの様子を写したものを掲載したが、それらの支持は高かった。特に、写真に自分が写っているということがインタビューの興味を引く要素であるようである。この理由としては、写真があることによって、自分たちが経験したことを思い出せるという意見が大半であった。一方、写真についてカラーのほうが良いという意見があった。また、写真の量についてはちょうどよいという意見が多かったが、もっと写真があったほうが良い（例えば各招聘委員の顔写真を載せる）という意見もあった。

その他、特筆すべき点として、インタビューに同席したインタビューの支援者のフォローのしかたからも示唆を得られた。例えば、「（新聞のなかで）ためになったところはどこか」という質問を、「へえーっ（人気テレビ番組のフレーズ）て思ったところは？」と言い換えたり、別の場面では、インタビュアー（筆者）の長く、曖昧な質問のしかたに戸惑っていた当事者に対し、「マルですか？バツですか？」と簡潔に言い換えることによって、当事者の意見がスムーズに引き出されていた。

上記のインタビュー・アンケート結果をもとに、新聞の修正案を作成した。変更を加えたのは次の点である。

第一に、絵を、手書きの漫画風のイラストにした。これは、インタビューで絵がわかりにくいという回答が一部あったことによるが、イギリスの先行文献に改めて目を通すと、ほとんどの場合、より実物の人間に近い漫画風のイラストが挿入されているため、これを参考にした。

第二に、イラストと写真は彩色とした。同時に、新聞の題名や記事の見出しもカラーにした。

第三に、文章を再吟味し、簡潔化を図った。また、文章の簡素化に伴い、文字量が減ったため、レイアウトもかなりゆとりができた。そして、生じたゆとりを損なわない程度に字の大きさを若干拡大した。

尚、情報量については、上述のようにもっと多いほうが良いという意見も一部あったが、今回は、より多くの人に情報誌が共有されることに重点を置いたため、結果的に修正案での情報量は限られたものとなった。

（d）修正案のインタビューの実施

修正案（資料：2）を作成後、前回協力を得た当事者のうち4名（セミナー参加者2名、招聘委員2名）に再度協力を得て、改めてインタビューを実施した。今回は、2名ずつの、

半構造的なグループインタビューを計 2 回実施した。また、前回のインタビューと同様、新聞の原案と修正案をページごとに対置させた資料を事前に送付し、予め目を通してもらうよう、併せて依頼した。

その結果、修正案は概ね評価を得た。特に、彩色とした点、イラストを変更した点、文章を簡素化した点で評価を得た。具体的には、イラストについては、原案の絵（フェイスマークや吹き出しを組み合わせたもの）が、「どれが顔でどれが顔じゃないのかわかりにくかった」という意見があった。一方、彩色については、「目を引く」「読んでみようと思う」という意見が得られた。

修正版のインタビューでは総じて会話が増え、初回でのインタビューでは聞かれなかった意見もいくつか聞かれた。例えば、ある当事者からは「英語を勉強してみたい」「外国にも行ってみたい」などの意見が聞かれたが、初回のインタビューではこのような発言はなかった。また、絵の内容について、初回のインタビューでは「問題ない」との意見が出されても、修正版のインタビューでは、初回のインタビューでは出てこなかった意見が聞かれた。このことから、修正を重ねることの意義、比較をもとに意見をきくことの有効性が考えられる。

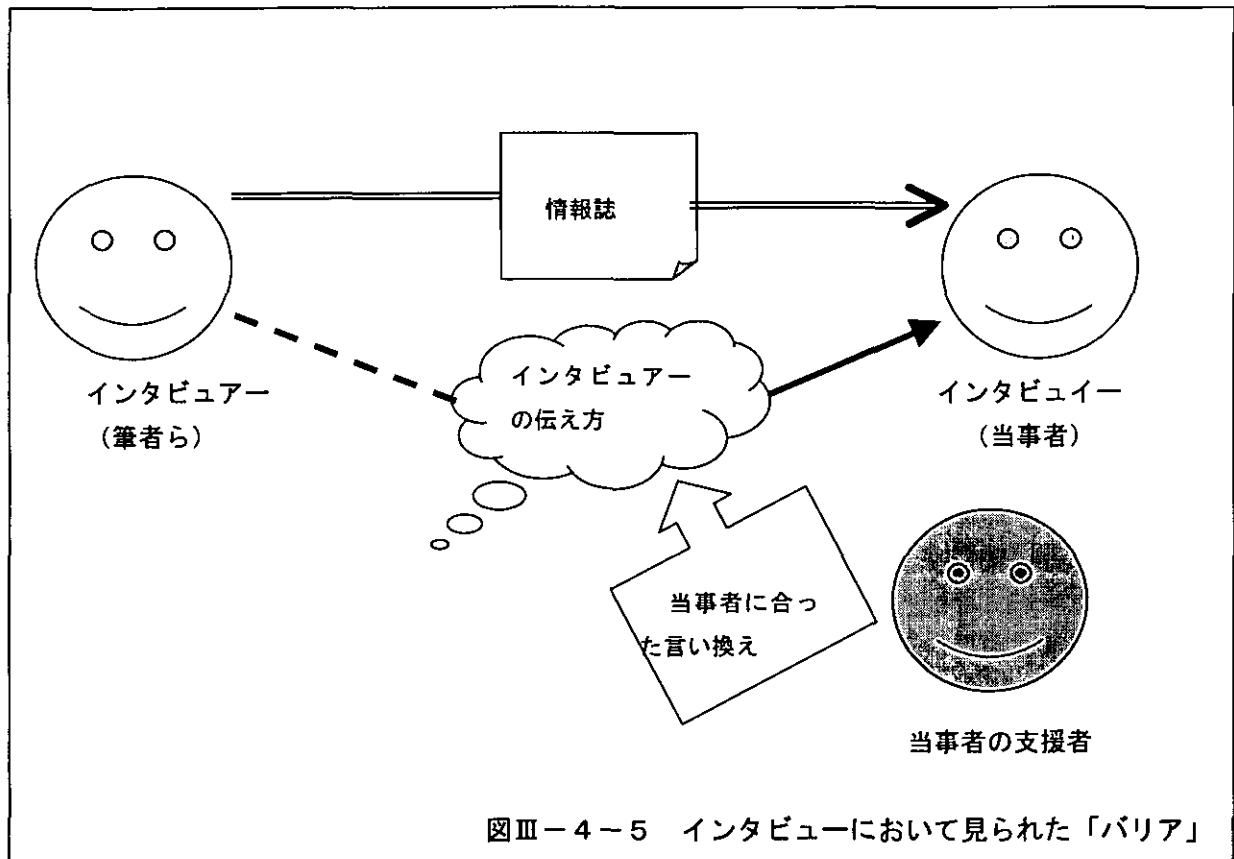
(3) 考察

以上、情報誌の原案作成からインタビュー・アンケートの実施、そして修正版の作成という一連の過程について報告をしたが、これは、インタビュー・アンケートへの協力を得た当事者（ならびにその人に日頃関わりのある支援者）との関わりをつうじた、筆者らの情報支援を通じた支援関係の変化の過程とも換言できる。

前項で触れたように、情報誌の原案は、上記①(b)で述べた先行研究で提示されていた情報形態を踏まえて作成した。また、インタビューガイドについても、先行研究での指摘を踏まえて作成したことに加え、ツールを用意するなどの工夫をした。しかし、そうした情報は筆者らから当事者へ一方通行的に提示されたものであった。

実際にインタビューという関係（やりとり）が展開されると、沈黙や、「分からない」「なんとなく（わかる）」などのフィードバックがあった。そうしたフィードバックを分析すると、情報誌の内容のみに投げかけられたのではなく、インタビュアーによるインタビューの展開のしかた（会話による情報の伝え方・関係の展開のしかた）にも投げかけられたものであったと考えられる。また、インタビュアーの言い方を支援者が当事者に分かり易い形に言い換えてフォローをするという場面がいくつかあった。これらのエピソードから、インタビュアー側の、情報の提示方法を含めた当事者との関わり方の中に何らかのバリアがあるということ、そして、そのために伝わらない、さらには当事者の声を引き出せないということに、筆者らはインタビューという関わりを通じて気づくことができた。ここで言うバリアとは、すなわち「伝わり難さ」と言い換えることができる（図Ⅲ-4-5参照）。

2 回目のインタビューでは、初回のインタビューでは聞かれなかった意見が出されたが、それは、バリアが探知され、取り除かれた（すなわち筆者ら側の関わり方が変化した）ことによるものであった。当事者にとって何がバリアであるかを探知し除去していく作業には、インタビューやアンケート場面での、当事者と関わりを持ちフィードバックを得ると



ということが不可欠であった。また、バリアを探知し除去する作業を通じて、単に情報がより多くの人に伝わる、共有されるだけでなく、当事者一人ひとりの考えや思いが引き出され、皆で共有することができるという視点を得ることができた。

また、インタビューに協力を得た当事者のなかには、「今日、エンパワメント（インタビュー）の日だよね」と、インタビューに対して前向きな発言を職場でしていた人や、インタビュー終了後に「いっぱい話してきた」と仲間に報告する人がいた。2回目のインタビューではより活発に意見が聞かれた人もいた。上記のような点からは、情報誌を通じたインタビュー（をする・を受ける）という関係性を通じて自分のことに興味を持ってもらえる、自分の話を聞いてもらえる、自分の意見が反映される、存在を認められるという、自分への自信や評価の向上につながるということが伺える。ここまで見てきたように、

- 1) 当事者のフィードバックという参加の場面があるということ
- 2) 当事者一人ひとりの考えや思いが引き出され、皆で共有されるということ
- 3) 自分への自信や自己評価の向上

は、当事者のエンパワメントのひとつの要素であると言える。すなわち、情報誌の作成から修正案作成後のインタビューの実施という一連の過程は、当事者のエンパワメントの過程であったと言う事ができるだろう。

(4) 今後の課題

今後の課題としては以下の点が挙げられる。第一に、今回は筆者らが情報誌を作成した

が、本研究が当事者参加に関するものであることから、今後、当事者が情報誌作成の段階から参加することについて検討を重ねていくことである。初回のインタビューでは当事者の反応は薄かったが、2回目のインタビューでは活発に意見が聞かれ、積極的な姿勢が見られた。これには、前項でも指摘されていたように、支援者と顔見知りになっていたことに加え、伝わり難さというバリアが取り除かれたことがまず挙げられる。もうひとつにはインタビューが当事者にとって、自分の意見が反映されるという参加のプロセスであったことが挙げられる。今回は、当事者が参加したのは2回のインタビューに限られたが、もし、情報誌作成の初段階から当事者が参加することになれば、当事者のより多くの考えや思いが引き出されることにつながると考えられるからである。

第二に、セミナーから時間が経過していることに加え、セミナーのテーマが抽象的であることなどから、情報誌の内容を一層理解することは難しかったことが類推された。一方ではセミナー開催をつうじてテーマが具体化され、各自の生活により身近なものになっていったことが伺われたが、今後は、インタビューで意見として挙げられていた、生活を支援するしくみや他のグループの活動のことなど、彼らにとってもう少し身近な事柄を記事に取り上げ、当事者のエンパワメント支援について考察を深めていくことが考えられる。

(5) おわりに

既述のとおり、今回の情報誌作成の第一義的な目的は、より多くの招聘委員ならびにセミナー参加者が、セミナーで自分たちが経験したことを振り返る（評価する）活動に参加するための素材を提供することであった。一方で、情報誌をツールとした当事者のエンパワメントにつながる支援のあり方について、筆者らが考察を深める作業になった。

今回の情報誌作成という作業をつうじて、知的障害のある人たちに関わる支援者の役割として、次の2つが挙げられる。

第一に、その人たちが情報を得るうえでバリアとなっているものを、その人のペースと一緒に探り、取り除いていくという関わり方である。その関わりにおいては、原案のインタビュー場面で、インタビュアー（筆者ら）の伝え方を、インタビューイに分かり易い形に支援者が置き換えたというエピソードが示唆するように、その人の個別性を尊重した関わりが必要だと言える。

第二に、「～したい」という気持ちを引き出していく素材を提供していくことである。前項でも述べたが、インタビューのなかでは、「もっと他の人たちと交流したい」「生活のことについて知りたい」といった意見があった。これらの意見から伺えるのは、情報誌に掲載されたセミナーに関する情報が、自分の身近なものとなり、「～したい」というその人のパワーに転換されたということである。また、これらの発言からは、新たな活動の道筋が示されている。今後、前項にて既述のように、イベント終結後のフォローアップが実際に展開されることによって、情報誌を通じて伝えられた情報内容がひとつのきっかけとなって、その人の生活が転換していく可能性があると考えられる。

そして、こうした支援者の関わりによって、サービスを利用していくときの「当事者性」（自分の生活を組み立てる、コントロールする）⁵につながっていくものと考えられる。

（板橋 さゆり）

-
- ⁴ Gramlich et.al. Journey to Independence: what self-advocate tell us about direct payments Swindon People First and Norah Fry Research Center p51-56
- ⁵ 中野敏子「当事者参画をめぐる状況－英国：スウィンドン・ピープルファーストと「ダイレクトペイメンツ」活動への取り組みと検証」中野敏子（主任研究者）『障害当事者参加型の福祉サービス運営・評価のプログラム開発に関する研究 平成 14 年度総括・分担研究報告書』（厚生労働省科学研究費補助金障害保健福祉総合研究事業） p65

章 末 資 料 2

国際エンパワメントセミナー新聞

こくさい
国際エンパワメント
しんぶん
セミナー新聞

なかま
イギリスのピープルファーストの仲間がやってきた！

2003年2月22日(土) 24日(月)

めいじがくいんだいがく
明治学院大学



ほんにんかっどう
イギリスで、本人活動をしているスウィンドン・ピープルファーストのみな
さん(写真の人たち)と、いっしょけんきゅう
一緒に研究をしているヴァルさんとルースさんを、
にほんしょうたい
日本に招待しました。

しょうがいひとく
障害のある人の暮らしとエンパワメントについて、はなあ
話し合いをしました。

しんぶん
この新聞にかいてあること

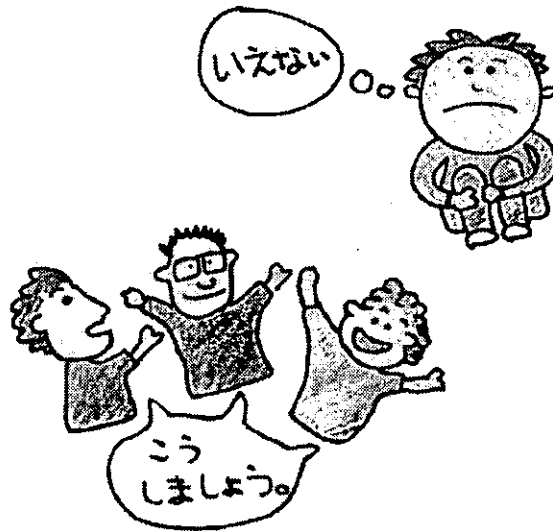
- ◆ しょうがいひとく
障害のある人たちの生活の今までとこれから
- ◆ エンパワメントってなんだろう

しょうがい ひと せいかつ
障害のある人たちの生活

いま
今まで

じぶん
自分のしたいことをいえませんでした。

がっこう せんせい しせつ しょくいん かぞく いしや き
学校の先生や施設の職員、家族やお医者さんが決めていました。



これから

じぶん
自分のしたいことをもっといってみましょう。

がっこう せんせい しせつ しょくいん かぞく いしや
学校の先生や施設の職員、家族やお医者さんは、あなたがしたいことをでき
るように手伝います。



スウィンドン・ピープルファーストのみなさんのこと

スウィンドン・ピープルファーストでは、こんな活動^{かつどう}をしています

- 自分^{じぶん}のことを話^{はな}したり、他の人^{ほかひと}の話^{はなし}をきく
- 仲間^{なかま}づくりをする
- みんなでいろんなことを調^{しら}べたり、他の人^{ほかひと}に教^{おし}える
- ダイレクトペイメントの使^{つか}い方^{かた}を支援^{しえん}する
- レクリエーション活動^{かつどう}をする など

ダイレクトペイメントって？

1. 自分^{じぶん}で必要^{ひつよう}なサービスや支援^{しえん}を選^{えら}びます。
2. 市^し（区^く）役所^{やくしょ}からお金^{かね}を受け取^とって、自分^{じぶん}で払^{はら}います。

自分^{じぶん}でお金^{かね}を払^{はら}うところが、日本^{にほん}の支援^{しえん}費^ひと違^{ちが}います。

今回^{こんかい}のセミナーには、ガリーさん、ゴードンさん、ウェンディーさんがきました。

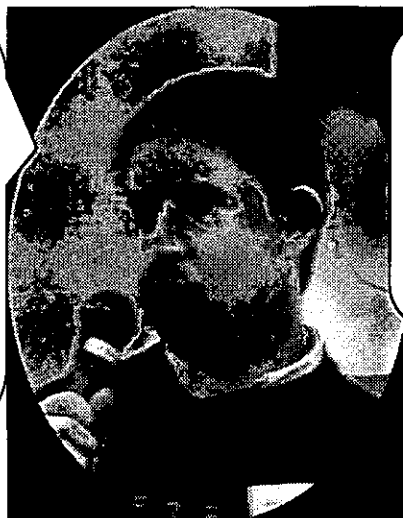


ガリーさん
ピープルファーストの
代表^{だいひょう}をしています。
スウィンドンのことを
紹介^{しょうかい}してくれました。
みんなで勉強^{べんきょう}をしたこ
とやピープルファース
トのことを、大きな会議^{かいぎ}
で発表^{はつぴょう}したりします。



ウェンディーさん
車^{くるま}イスで生活^{せいかつ}をしています。
自分^{じぶん}の家^{いえ}で暮^くらしています。ピー
プルファーストで、事務^{じむ}の仕^し事^{ごと}を
しています。

ゴードンさん
ダイレクトペイメントをつ
かっ^{せいかつ}て生活^{せいかつ}しています。
他の人^{ほかひと}にも、使^{つか}い方^{かた}を
教^{おし}えたりしています。
日本^{にほん}でカメラ^かを買^かいまし
た！



国際エンパワメントセミナーのようす

2月22日(土)



社会にあるバリア(問題)について、
イスをつかって説明するヴァルさん
とルースさん



みなさんからでた、「こうしてほし
い」という意見で、ホワイトボードが
いっぱいになりました



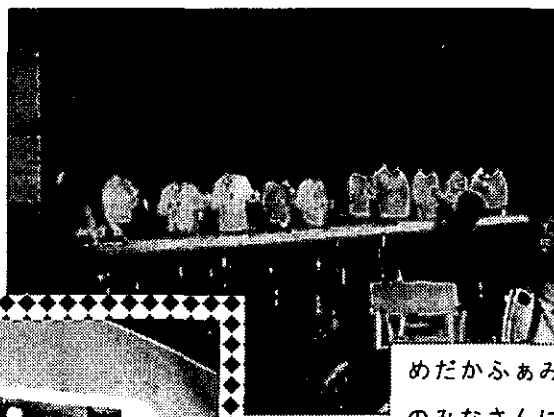
スウィンドン・ピープル・ファースト
のみなさんが、自分たちの活動に
ついて説明してくれました

24日(月)

歓迎&お別れパーティ



みんなでクラッカーをな
らして、パーティのはじま
りです



めだかふあみりい
のみなさんによる
ハンドベル演奏



スウィンドンのみなさん
の写真がデザインされた
ケーキ!